「神はすべてを益とされる」Ⅳ

ローマ８：２８

堀田修一　　　２３・９・１７

「神を愛する人たち（まず神に愛され、神の愛を信じ神の愛に感謝し神を愛する人たち）、すなわち、神の御計画にしたがって召された人たち（神の招きにより、主を信じた人たち）のためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています」ローマ８：２８
Ⅰ　パウロは、神がすべてのことをともに働かせて益となることを「私たちは知っています」：２８と言っているが、２６節では「私たちは、何をどう祈ったらよいか分からない」と言っているみことばの調和を見たい。

１．聖書には、表面的に見ると逆説的に思える箇所がある。キリスト者とは、身近な事柄については理解できない時でさえ、究極的な事柄については神を信頼して確信していられるものです。それこそ、私たちの最終的な慰めです。私たちは何もかも知っているわけではありませんが、一つのことは分かっています。それは、見えるところ、あらゆる点で不利な状況にあり、試練、苦難の中に置かれることがある。その時、私たちは困惑のあまり、どのように何を祈るべきかもわからない時がある。御聖霊によって自分の中に作り出されるうめきを上げることしかできない。しかし、このように苦しい時でさえ、御聖霊によりこう確信させせられる→「私は、どちらを向くべきか、なぜ今の苦難が起こっているのかわからない。しかし、このことだけは知っている。いま私に起きている一切の状況にもかかわらず、このこと、また他の一切のことは、偉大な神によって、すべてのことがともに働いて私の益になるのだ」と。これこそ私たちの究極の慰めです。

２．現在の自分に何が起こりつつあるか理解できないとしても、決して私たちは、失望する必要はない。悪魔は神を疑わせようとして来る→「このような苦しみが与えられても、お前は自分が神に愛されている神の子どもだとか、神が愛の神だとか、神がお前を主の再臨の時に栄光に至らせると言えるのか」と。
私たちは、悪魔に語り返す罠にはまらず、聖書全体と御聖霊に頼り、自分自身に語り掛けよう。「この地上では、私に理解できないことが起きる。それでも神がすべてを益とされる約束を信じる。神の御計画と御心を私たち人間には完全には理解できないが、私のための神の御計画に失敗はないのだ」と。

３．弱く、罪が心に残っている私たちは、霊的な戦いにおいて、時々負けることもある。また多くの点で失敗もする。しかし、それらを超えて確かなことは、最終的に、神がすべてを益とされること、私たちを主にあって圧倒的な勝利者（８：３７）とされる確実な恵みである。「私たちには分からない」：２６と「私たちは知っています」：２８は、キリスト者生活の実に適切な要約です。目当て、究極（主の再臨による栄化、新天新地）は確実にされているが、そこに向かって旅をしている間は、私たちに理解できない多くの事柄が起き、しばしば困惑し、混乱する。聖書には、主を信じると罪の赦しと永遠のいのちが与えられると確実な素晴らしい救いが

語られている。と同時に、聖書には、主を信じると、この地上で、苦難や試練から免除されるとは語られていない。「世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました（主の十字架での罪の贖い、赦しの完成、主の復活による死と悪魔への勝利）」ヨハネ１６：３３。

Ⅱ　すべてを益としてくださる神の励ましのみことばを味わいたい

１．神への信頼が弱まる時「空の鳥を見なさい。…天の父がこれを養っておられるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。…きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか」マタイ６：２６－３０。「さまざまな試練にあうときはいつでも、この上ない喜びと思いなさい。…信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者（主の品性に成長した者＝ローマ８：２８の「益となる」の意味）となります」ヤコブ1：２－４。

２.「肉の父はわずかの間、自分が良いと思うことにしたがって私たちを訓練しましたが、霊の父は私たちの益（霊的成長）のために、私たちをご自分の聖さにあずからせよう（益）として訓練されるのです」ヘブル１２：１０。神がすべてのことをともに働かせ、私たちの益（主の姿への成長）とされています。

３．想像を絶する試練に会ったヨブは、試練の後のほうが、はるかに神を深く知る人に変えられている→「ヨブは主に答えた。あなたには、すべてのことができること、どのような計画も不可能ではないことを、私は知りました。…今、私の目があなたを（霊的に）見ました。それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰で」ヨブ記４２：１―６。

「見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いだと私たちは思います。あなたがたはヨブの忍耐のことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます」ヤコブ５：１１。

私たちは、次々と起こる試練の時に、性急な狭い考えの否定的な判断・神抜きの判断を下さないで、偉大な神が試練の最中にも働いておられ、試練の後、最終的にすべての苦難、試練とともに働かれ益とされること（神の御計画の前進、私たちに忍耐を養い主の品性に成長させる益）を信じて主とともに歩みたい。

ヤコブの生涯にも同じ真理がみられる。ヤコブは生来難しい性質を持っていたため、神はヤコブを神の人とするために、手を変え品を変え、愛するゆえに取り扱われた。どれほどヤコブは、苦しみ、試練に会ったことだろう。しかし、神は、ヤコブの生涯の出来事、すべてを用いて益とし、彼を砕かれ、へりくだった神の人に変えられた。私たちも、神の愛の訓練により主の品性に変えられ続けている途上の者です。

この真理は詩篇にも見られる。「苦しみにあう前には　私は迷い出ていました。しかし今は　あなたのみことばを守ります（苦しみが益となった）」詩篇１１９：６７。「苦しみにあったことは　私にとって幸せでした。それにより　私はあなたのおきて（みこころ、み教え）を学びました（苦しみが益となりました）」：７１。

Ⅲ　最後に歴史において聖徒が味わってきた経験を見たい。聖徒たちは、口をそろえて証言し「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」と語っています。キリスト者である人々は、苦しみの炉の中で、迫害や試練を受けているとき、特別にご聖霊が臨在され、最上の状態とされます。第二次世界大戦中にヒトラーの支配下にあった一部のドイツ人キリスト者たちの勇敢な証しがあり、ドイツ軍に占領されていた時期にノルウェーにいた、ある聖徒たちの経験した神の支えの証しがある。歴史の中で殉教者や信仰告白者は、「苦しみの炉の中にいたときほど神を深く知ったことはない。試練の時は、癒しの時であり、成長するときである」と語っている。自分は大丈夫だろうかと思う弱い私たちも励まされる。私たちの弱さ、辛さの中に主の恵みと力は現わされる。旧約時代も新約時代も、神の民の試練や困難は、より新たに、より深い形で神が神の民たちにご自分を現す（益）ためにお用いになったものです。連綿と続く、すべての世紀を通じて、聖徒たちの経験によって裏付けられ、確証され実証されてきたのがローマ８：２８の真理です。

　私たちにとって、すべてが順調で何の問題、苦しみもない人生はありません。しかし、私たちの身に起こることすべてが神によってともに働いて益（神を深く知る、主の姿に成長する益）となる事実を信じ、神を見上げて歩みましょう！